

# ふれコン雑感

秋和 さとる

私がふれコンに参加するようになって10年になる。

山梨県民ではない私にとっては、東京から山梨への移動は大変に長く感じたが、初めて山梨の自然を見たときの感動はよく覚えている。特急かいじ号に乗り、勝沼ぶどう郷駅にさしかかるトンネルを出たときに見える甲府盆地の景色。山宮ハイタウンからの夜景。10年経った今でもその輝きは変わっていない。

今では「ミュージカルのためにわけわからん曲を作る人」として定着してきた私であるが、10年前は別の役割を負うためにふれコンに参加していた。10年前は2011年、かの東日本大震災の年である。その年のふれコンでは、大震災に関わる詩の朗読が行われていることになっており、当時大学生だった私は即興演奏の腕を買われて同期とともにふれコンに参加したのである。初日、案内されてリハーサル室に入ると、初老で小太りの男性が椅子にふんぞりかえって、私の同期に向かい朗読の指導をしていた。その男性こそ、今ではミュージカルで作詞のコンビを組むことも多い、水木亮氏だったのだが、その熱血ぶりに威圧された私は、内心あまり関わらないようにしたい、あまり話しかけないようにしたい、なるべくあの人の記憶に残らないような感じで山梨を後にしたい…などと当時は思ったものであった。ただ、その年のふれコンが終わる辺りには、「水木のおっちゃん」とみんなで呼び合えるほどに仲良くなり、翌年から脚本・水木氏、音楽・秋和というコンビで、ふれコン内外で作品作りをするようになるのだから、人間というのはわからないものである。

さて、そんな初年度から10年が経つと、本当にいろいろな出会い、そして別れがあったなあと思う。そのすべてを羅列するととてもじゃなくここに書ききれないので、ここからはふれコンに参加してよかったことや、ふれコンに望む私の心情について書いていこうと思う。

ふれコンの良さは、しっかりとした形のあるコンサートながら、カジュアルでゆるやかな雰囲気にあると感じる。私の場合でいえば、ある日、思いも寄らないタイミングで突然詩が送られてくるころからその年の作品作りは始まる。大体夏頃になると、自分の中でプランを立てて、「今年はジャズにしよう」とか「ロックもいいな」とか前もって曲の感じをイメージするのだが、実際に送られてきた歌詞はド演歌調だったりしてまずそこで出鼻をくじかれる、といった具合。時間をかけて楽譜を作り、歌をレコーディングし、「これでどうでしょうか」とメールを送った後に「歌詞を直しましたので・・・」と、全く違う歌詞が送られてくることも度々起こりうる。ただ、そこでカッカするような人はふれコンではやっていけない。メールが来てないのに「メール見たずらか」と電話がかかってきたり、1人にしか言っていないことを出会った何人もの人がかいつの間にか知っていたり、と、驚かされることも度々あるが、そんな感じのゆるさだからこそ、長く続いてきたのだと思う。そんなゆるさに影響されて私も当日の宿泊先を予約し忘れて結局塩山までいくハメになるなど、日頃の生活態度にまで影響が出るのでふれコンは危険である。覚悟して仕事は引き受けなければならない。

ただ、そんなゆる～いふれコンに、ゆる～い感じの出演者がたくさん集まるその空間は私は嫌いではなくて、その中の人間関係はむしろ心地良い。甲府についたら甲府駅のうどん店で吉田うどんを食し、稽古では笑い合いながらみんなでワイワイ盛り上がり、帰りにはカップのワインを流し込んで夕日に照らされた甲府盆地を見ながら東京に帰る、というその一連のルーティンは、一種の小旅行のようで、私を幸せな気分させてくれた。私の音楽で人が幸せになる、ということも嬉しいし、私も出演者の皆様からは元気をもらった。

時代は変わる。10年前、電車の中で使っていた大きなノートパソコンはタブレットに代わり、ガラケーはスマートフォンに代わった。あどけない面持ちの私であっても、今では髪に白髪が交じるようになった。ただ、ふれコンへの情熱は変わることはなく、年ごとに大きくなっているようだ。今は辛い世の中ではあるが、ふれコンの出演者たちの笑顔が、未来を明るい方向に導いてくれることを、私は信じているし、私自身もその手伝いをできればと思っている。

